

女子大國文 第百六十三号 平成三十年九月三十日

二〇一八年度公開講座

三卷本『枕草子』不審本文考

——「風は」の段「夏とほしたる綿衣」を中心に——

後 藤 康 文

一 はじめに

誰もが知る『枕草子』。清少納言原作のいわずと知れた名著だ。ところが、この作品を、現代の流布本となった三巻本本文に従って細かく読み進めてみると、疑わしい箇所があまりに多いので驚いた。おまけに、従来の注釈書も肝心なところにかぎってほとんどがその無力さを露呈しているのだから、自称プロとしてかかる現状の打開を図るのは与えられた使命と勝手に心得た。世のため人のため、そして、類稀な才媛清少納言のためにも、現存本文の不審箇所は可能なかぎり正してやらねばならぬという義憤が、ある晴れた日に勃然と湧き上がってきたのである。

さて、そうした試みの実践第一弾として、すでに「三巻本『枕草子』不審本文考（一）」（北海道大学文学研究科紀要「第百五十三号、平二九・一一」）を著した。本稿は、いわばその続編であり、有名な「野分のまたの日は」の記事直

前に位置する「風は」の段の不審本文を対象に、諸注の呆れた実態の暴露をまかねて、これに独自の考察を加え、新たな本文改定案の提示に努めるものである。

二 「生絹の単衣重ねて着たるも」について

何はともあれ、まずは問題部分の本文を引用しよう。

八、九月ばかりに、雨にまじりて吹きたる風、いとあはれなり。雨のあし横ぎまに、さわがしう吹きたるに、①夏とほしたる綿衣のかかりたるを、②生絹の単衣重ねて着たるも、いとをかし。この生絹だに所せく暑かはしく、取り捨てまほしかりしに、いつのほどにかくなりぬるにかと思ふもをかし。

〔新編日本古典文学全集 枕草子〕第百八十八段・三二六頁九行〜一四行

秋も深まったとある暴風雨の夜、「あれほど暑かったのに、いつの間にこんなに涼しくなったのか」という清少納言の感懐が記されているが、ここでもうにも腑に落ちない箇所が傍線を付した①と②なのだ。本来は順番に片をつけていくべきかもしれないが、②「生絹の単衣重ねて着たるも」の方が問題としてははるかに簡単なので、便宜こちらから先に処理しておこうと思う。

はじめに、②に関する三巻本諸注の解釈を列挙すると次のごとくである（「凡例」については前掲拙稿を参照されたい）。

△生絹の単衣に重ねて着た風情も

（『評釈』通釋）

×生絹の単衣を重ねて着た、そんな気分も

『全講』文意

×その上に生絹の単衣を重ねて着た心地も／物に掛けてあったのを（取って着て、その上に）。

『旺文社文庫』現代語訳／脚注

△生絹のひとつに重ねて着たのも／能因本、前田本「ひとへにひきかさねて」。

『角川文庫』現代語訳／脚注

？生絹の単衣の上に重ねて着たのも／それをまたまた下ろして着て、その上に生絹の単衣を更にかけて寝る。台風

の影響を受けた吹き降りに、気温が急激に低下した状況が、よく描かれている。

『解環』口訳／語釈

・能本、前本「すずしのひとへに引きかさねて」。

『和泉古典叢書』頭注

△生絹の単衣に着重ねて臥す。

『新大系』脚注

×生絹の単衣を重ねて着ているのも／「単衣に重ねて」と「に」を補うのは疑わしいので、仮に「単衣を」の意と

見る。

『新全集』現代語訳／頭注

△生絹の単衣に重ねて着たのも／能本・前本「ひとへにひきかさねて」。

『全訳注』現代語訳／語釈

一覽するに、従来「単衣に」（綿衣ヲ重ネテ）説（△印）と「単衣を」（綿衣ニ重ネテ）説（×印）とが対立している様が見て取れる（本文解釈学の大家萩谷朴氏の『解環』はどちらを採っているのか真意不明なので？印とした）。

しかし、この対立に決着をつけるのはきわめて容易である。つまり、下着の単衣を、掛け布団に相当する綿衣の上に、着重ねて寝る奇妙な御仁なんぞ世にあらうはずもなく、よって、を説はまったくの論外ということになるのだ。なぜこのような珍妙な解釈が生じるのか、理解に苦しむと評さざるをえない。

かかるしだい、ここは「単衣に」（綿衣ヲ重ネテ）説の方が「正解」となるわけだが、これまでのこの立場に立つ

諸注の措置にもまたいただけない点がある。いうまでもないことであるが、現存本文「単衣重ねて」をこのままの形で「単衣に、綿衣を重ねて」の意に解くことは不可能な話だからだ。ではどうするのか。二重傍線を付した能因本・前田本本文に倣って、三巻本文の「単衣」と「重ねて」の間に元来は格助詞「に」が存在したと考えて、実際にこれを補ってやればよいのである。この「に」は文法的に絶対なければならぬ。松尾聰・永井和子両碩学による『新全集』が何故「単衣に重ねて」と「に」を補うのは疑わしいので、仮に「単衣を」の意と見る。」(頭注)と判断したのか謎であり、よくわからない。

ちなみに、仮名「に」は一般に脱落しやすい文字だったようで、三巻本『枕草子』の中からでも、次のような実例を見いだすことができる。

a もし、この弁、少納言などのもとに、かかる物持て来る下部など(に)は、する事やある

『新編日本古典文学全集 枕草子』第百二十六段・二三九頁二二行〜二三三行

b さすがに(に)くしと思ひたるにはあらずと知りたるを、いとあやしくなむおぼゆる。

(同第百二十九段・二四三頁八行〜九行)

c かしこきものは、乳母の男(に)こそあれ。

(同第百八十段・三二七頁四行)

右三例ともに「に」は確実にあるべき文字。断言はできないものの、**a**の場合は上の「と(止)」と「に(二)」との字体相似、**b**は踊り字「ト」の消失、そして、**c**のケースは「おとこ」の「こ(三)」と「に(二)」との字体相似が、それぞれ「に」脱の原因となっていようか。

以上述べてきたことをまとめると、傍線部②の本文改定案とその大意は、

◎生絹の単衣に重ねて着たるも

「生絹の単衣（の上）に重ねて着たのも」

となる。いつしか格助詞「に」が失われてしまったプロセスは特定困難であるが、「ひとへに（爾）か（可）さねて」の文字列が字体相似による「に（爾）」文字の脱落を惹起し、「かさねて」の「か（可）」のみが残ったと推定してみる。ことなどは、可能性の一つとして許されようか。

三 「夏とほしたる綿衣」について（一）

さて、①「夏とほしたる綿衣」である。皆目わからない。ところが、三巻本諸注にとってここは特別問題のある箇所ではなかったらしい。

×「夏ずつと着て寝た綿入れの衣が、掛けてあつたのを（取り出して）」

（『評釈』通釋）

×夏中通して着た綿入（夜具）の汗の香がしたのを。「かかりたる」は前田本「汗のすこしかかへたる」によって解する／三巻本の「かゝりたる」はもとおそらく「かゝへたる」の誤写であろう。同様の例は、後の「二二三」に

も見られる。「かゝふ」は香が漂う意の動詞で、「汗の香すこしかかへたる」の表現は「四四」にも見える。なおこの部分、能因本には「あせのかなとせしかかはき」とあり、疑わしい。〔大系』頭注／補注）

×夏中通して着た綿入の汗の香がするのを／前田本に「汗のすこしかへたるに」とある。「かかふ」は香が漂う意の動詞。三巻本の「かかり」も「かかへ」の誤写ではなからうか。「かかり」のまままで解すれば物に掛つている意とするほかないが、やはり「かかへ」として汗の香のする意と解したい。

〔全講〕文意／釈義

×(部屋の中で) 昼寝のときなどに一夏中とおして着た薄綿入れがものにかかっているのを／薄綿入れの衣。昼寝などの時用いる。夜具の一種。

〔旺文社文庫〕現代語訳／脚注

×一夏を通して使つた綿入れの衣架に掛つているのを

〔角川文庫〕現代語訳

×夏中使つてた綿入れが(衣桁に) かかっているのを／夜具としての桂に、薄く真綿を引いて入れて入れているのを、むしろ夏の寝冷えの予防の為に用いていた。そろそろ秋になって、それも不用なので、風通しのよいところに衣桁を据えて、汗の湿気を抜く為に干してあったものと見える。

〔解環〕口訳／語釈

×夏中使つてきた綿衣(中略)が、衣架にかけてあるのを、肌寒くなったので。

〔和泉古典叢書〕頭注

×一夏とおして使つた綿衣が(衣桁に) かかっているのを。「綿衣」は綿入れで、夜具として夏も用いた。それを衣桁から降してまた使う。

〔新大系〕脚注

×夏中通して着た綿入の着物の、何かに掛けてあるのを／綿衣は夜具として用いるのであろう。

〔新全集〕現代語訳／頭注

×夏の間着通した綿入れの着物で、何かに掛けてあるのを／綿入れの着物。夜具として用いたものであろう。

〔全訳注〕現代語訳／語釈

・以下、四二段と「風」「雨」「綿衣」、それらによる爽快感が共通。堺本は一段に纏める。

〔新編〕脚注

「かかりたる」の部分で「かかへたる」の誤写かとみる異見『大系』『全譜』はあるものの、当面の「夏とほしたる綿衣」の解釈に関しては傍線部のごとくきれいに一致してはいないか。まさかのノープロブレム!となれば、これをことさら「不審本文」と認定して疑う方がどうかしているのだろうか。

いやいや、おそらくそうではあるまい。誤りとは、往々にしてこういったところにこそ潜んでいるものなのだ。以下、具体的に理由を述べよう。

まず第一に、「夏とほしたる」が「一夏中」の意を表すとするならば、次の例に同じく「夏をとほしたる」と書かれるべきではなからうか。

・今日は、残りおほかる心地なむする。夜をとほして、昔物語も聞え明かさむとせしを、鶏の声にもよほされてなむ
〔新編日本古典文学全集 枕草子〕第百三十段・二四四頁一五行～二四五頁一行

「夜をとほす」は文字どおり「徹夜」の意であり、かりに「徹夏」なる語の訓読を試みる場合、「夏をとほす」と目の語を支える格助詞「を」は必要不可欠な要素であるはずなのだ。そこで念のために、「とほす」の語義と用例を参照すべく手近にある学習用古語辞典をいくつか引いてみた。すると、実におもしろい結果が出たのである。

× (他サ四) ②通過する。越す。「夏ししたる綿衣ぎわたのかかりたるを」(枕・八九月ばかりに)

(守随憲治・今泉忠義・松村明監修『旺文社古語辞典』昭四四改訂新版)

○一 (他サ四) ②越す。経過する。「夜をしして昔物語も聞え明かさむ」(枕・一三六)

(井上宗雄・中村幸弘編『福武古語辞典』昭六三初版)

×〔四段〕⑤始めから終りまでずっと継続させる。「夏ーしたる綿衣(ぎぬ)」(枕一九八)

(大野晋・佐竹昭広・前田金五郎編『岩波古語辞典補訂版』平成二第一刷)

×〔一他動詞・サ四〕④継続する。続ける。越す。経過する。〔枕草子〕八九月ばかりに「夏とほしたる綿衣(ぎぬ)のかかりたるを」〔訳〕夏中続け(て用い)ていた綿入れの、(汗の)においがしたのを。

(編集責任者市川俊男『学研全訳古語辞典』平一五初版第一刷)

○〔他サ四〕③ある期間を過ごす。越す。〔例〕「夜をとほして昔物語も聞こえ明かさむとせしを、にはとりの声にもよほされてなん」(枕草子・頭の弁の職に)〔訳〕夜を通して昔話でも申し上げて夜を明かそうとしたのですが、ニワトリの声にせきたてられました。

(北原保雄編『小学館全文全訳古語辞典』平一六初版第一刷)

すなわち、前掲第百三十段の「夜をとほして」を用例として挙げ、「越す。経過する。／ある期間を過ごす。越す」の語義を認めるもの(○印)と、ほかならぬ「夏とほしたる綿衣」を根拠に、「通過する。越す。／始めから終りまでずっと継続させる。／継続する。続ける。越す。経過する」といった語意を定めるもの(×印)とに二分されたのだ。これだから、うっかり辞書を信じてはならない。このケースについて説明すると、前者(○印)は「徹」の確例に基づく語義認定であるのに対して、後者(×印)はそうではないということ。当たり前のことだが、本文自体の信憑性が問われる用例は、そもそも根拠として持ち出してはならないのである。

さて第二に、現本文をかりに「夏を」とほしたる綿衣」に改訂したとして、そもその話、「綿衣」を「夏をとほし」て着れないし使用するなどという不可解な習慣が、当時実際にあったとはどうい思われないのである。常識的見地

からしておよそ考えづらいことであるし、つづく「この生絹だに所せく暑かはしく、取り捨てまほしかりしに」云々との文脈上の不整合は、何人をもつてしてもいかんともしがたいところだろう。それらの夏の日々、暑さのあまり今日の下着に相当する「生絹の単衣」ですら脱ぎ捨てたい気がしたのにと述べられているのであつてみれば、その一方で、たとえタオルケット代わりであつたにせよ、「綿衣」が一日も欠かせない夏季の必需品であつたはずはないのだ。実は、三巻本『枕草子』においてはもう一つ、「綿衣」が出てくる別の章段（七月ばかりに、風いたう吹きて」の段）があるので全文を紹介しよう。

七月ばかりに、風いたう吹きて、雨などさわがしき日、おほかたいと涼しければ、扇もち忘れたるに、汗の香すこしかかへたる綿衣の薄きを、いとよく引き着て、昼寝したるこそをかしけれ。

『新編日本古典文学大系 枕草子』第四十二段・一〇〇頁七行～一〇行

初秋七月の雨風の強い日に、先月までとはうって変わつてほぼ終日とても涼しいので、それまで手放せなかつた扇の存在もついつい忘れてしまい、わずかに汗の匂が残る綿入れを首元までしっかりと掛けて、昼寝をしたのがおもしろいと、そう書かれている。ただそれだけの短い記事であるが、従来「風は」の段との関連が注目され、堺本では両者が実際に一括されている。と、ここで驚かされるのは、三巻本諸注の開示する解釈の実態なのである。

たとえば、増田繁夫氏の『和泉古典叢書』は、

？綿衣は普通冬に着るものであるから、ここは夜具に用いるものであろう。秋なので綿衣をかけて寝ている。（頭注）

と説明している。すなわち、「綿衣」は「普通冬に着る」衣類であるが、秋に入りすっかり涼しくなってきたので、昼寝用の「夜具」として使用したのだと。しかし、とりわけ最後の波線部「秋なので綿衣をかけて寝ている」とする理解と、同書が先に「夏中使ってきた綿衣」（頭注）と解していた部分とは、いったいどう読めば論理的に折り合うのだろうか。しつこいようだけれども、「夏中使ってきた綿衣」は「普通冬に着る」衣類なのだが、「ここは夜具」として用いられたのであり、涼しい「秋なので」それを「昼寝」時に「かけて寝ている」のだというのでは、まったく筋が通らないと思う。

また、本稿が本文引用のベースにしている『新全集』は、

？綿衣は冬に着る。ここは秋の夜具に用いているものと見られる。／初秋の感じを夏の汗の残り香を軸としてとらえたもの。

（頭注）

との見解を提示しているが、「汗の香すこしかかへたる」の「汗の香」を「夏の汗の残り香」と捉えるのはいかなものだろうか。これが前掲の「夏中通して着た綿入の着物」（現代語訳）という理解に呼応するのは明らかながら、断じて従える解釈ではない。第四十二段の「綿衣」にはほんの「すこし」だけ「汗の香」が残っていたのである。とするならば、それは昨冬着用した期間の汗の匂いがいまだ残存していて微かに漂ってきたと解するのが順当だからだ。それがもし、今年の「夏中通して着た綿入の着物」であったなら、「すこしかかへたる」どころではなく大量に吸収したであろう夏場の汗の威力が存分に発揮され、さぞかし臭くてたまらなかつたに違いない。

さらに、上坂信男・神作光二両氏らの共著『全訳注』に至っては、

？（夏の間の）汗の香が少し沁みついている綿布で作った薄い衣を

（現代語訳）

のごとき、もはや救いようのない様相を呈している。どこからどう見ても意味不明の訳文としか評せないわけだが、諸注のこうした苦しい解釈の原因が、当面の「夏とほしたる綿衣」の誤解もしくは難解さにあること明白といわねばなるまい。

四 「夏とほしたる綿衣」について（2）

では、どう考えればよいのだろうか。従来の定説が誤りであることは前節の考察においてはつきりしたと思うが、では、それに替わる「正解」をどのようにして導いてやればよいのだろうか。遺憾ながら、まことに遺憾ながら、现阶段では、決定的な代案を出すに至っていない。だからといって、人様の所業を散々批判しておいてここで終わるわけにもいくまい。

そこで、本稿では、「ほしたる」の部分を「干したる」の意に固定することとし、そのうえで残る「夏と」の部分の「復元」案については次の三つの仮説を提示する。

A 夏・干したる綿衣 ↑ 「と」 衍字説

〔（不用な）夏（の間）干して（乾かして）いた綿衣〕

B 夏外に干したる綿衣 ↑ 「に」 脱落説

〔（不用な）夏（の間部屋の）外に干して（乾かして）いた綿衣〕

C夏^つと干したる綿衣 ↑「ゝ」脱落説

〔(不用な)夏(の間)ずっと干して(乾かして)いた綿衣〕

右三者のうち、Aは「夏と」の「と」を衍字と判断して削除する考え方、Bは、「と」を「戸」の意に解し、本来はその下にあった「に」が脱落したものとみてこれを補う考え方(本稿第二節で例示した「に」の脱落例aの場合に同じ)、そして、C説は「夏」の仮名書き「なつ」に接続していた踊り字「ゝ」が転写の過程で消失したと想定して「つ」一字を補充する考え方である。

さて、便利な消去法のお出ました。すると、最初に可能性が消えるはC説だろう。なぜならば、副詞「つと」が「ずっと」の意を表すのは、

・淑景舎は北にすこし寄りて、南向きにおはす。紅梅、いとあまた濃く薄くて、上に濃き綾の御衣、すこし赤き小桂、蘇芳の織物、萌黄のわかやかなる固紋の御衣奉りて、扇をつとさし隠したまへる、いみじう、げにめでたくうつくしと見えたまふ。

『新編日本古典文学全集 枕草子』第百段・二〇一頁八行〜二〇二頁二行
・この養ひたる子をも、むげにわがものになして、女はされどあり、男子はつと立ちそひて、うしろみ、(中略)所得、いみじき面もちして、こと行ひなとす。
(第百八十段・三二七頁七行〜三二八頁)

といった文脈においてであり、「ずっと乾かす」と解くにはその用法に無理があるといわねばならないし、加えて、当時、夏中、「綿衣」を(綿を入れたまま)「干し」つづけたという確証もまったくないからだ。この点はB説もほぼ同断

で、実際に「綿衣」を（綿を入れたまま）「外」（室外または戸外）に干していたかどうか不明としかいえない。よつて、B説もまたあえなく成仏。したがって、今はしばらく、残ったA説を採っておくことにする。

天皇御製歌

・春過而 夏来良之 白妙能 衣乾有 天之香来山

〔万葉集〕卷一・二八

がただちに脳裏に浮かぶだろう。以下アリバイ的に、それ以降の和歌における「衣」を「干す」用例を任意に挙げておこう（引用はすべて『新編国歌大観』に拠り、表記もそのままとした）。

夏ばらへ

・川社しのをりはへほす衣いかにほせばかなぬかひざらん

〔貫之集〕四二五／『俊頼髓腦』三三〇／『古来風躰抄』一一一／『新古今集』卷十九神祇・一九一五等々

かぐら

つらゆき

・かはやしろしのをりかけほす衣いかにほせばか七日ひざらん

〔古今六帖〕二一六

しみづの宮、豊前／し水でらのろんを

匡房

・ほさばやなしのをりかけてほす衣しみづの宮のながれたえせで

〔夫木抄〕一六一五六／『江帥集』三〇二

・なにはめのころもほすとてかりてたくあしびのけぶりたため日ぞなき

〔古今六帖〕三八二・三・つらゆき

又ともししたるところ

・あさかりの露にぬれたるころもをばよるのともしのひにやはすらん

『能宣集』四三五

(三月中)

・やまひめのそめてはさほすころもかと見るまでにほふいはつつじかな

『好忠集』七九

五 おわりに

以上、枚挙に遑がない三卷本『枕草子』の不審本文のうち、「風は」の段のそれを俎上に載せて考察を加えてみた。傍線部②「生絹の単衣重ねて着たるも」に関しては、「単衣」の下に格助詞「に」一文字を補ってまず間違いないと思うが、①の「夏とほしたる綿衣」の方は納得のいく解を得るに至らなかった。残念無念、齒痒いことこの上ない。当時「綿衣」は季節に応じて中の綿を出し入れしていたと考えられるため、「ほしたる」を「干したる」の意に固定する方針を一度は潔く撤回し、また別の角度からこの難問に迫る姿勢も要求されよう。

従来の考え方を批判し否定することはさほど困難な作業ではないが、それに替わる「正解」を案出するのは、ことほどさように生易しくはないのである。このたび不完全燃焼に終わった不審本文「夏とほしたる綿衣」の真相究明については、なお今後の課題としたい。

【付記】本稿は、二〇一八年度京都女子大学国文科公開講座（六月七日）に講師としてお招きいただき、会場でお話した内容にほぼ基づくものです。席上貴重なご意見を賜りました大谷俊太先生、坂本信道先生には衷心より御礼申し上げます。また、当日熱心に聴講してくださった多数の学生さん、京都市民の方々にも深甚の謝意を表したく存じます。お世話になった皆様、どうもありがとうございました。

（北海道大学大学院教授）